

牢屋の原

長谷川時雨

青空文庫

金持ちになれる真理となれない真理——転がりこんで来た金玉かねだまを、これは正当な所得ではごさいませんとかえして貧乏する。いまだきそんなことはないかもしれないが、私のうちがそれだった。

御維新のあとのごたごたが納まつても、なかなか細こまかしいことは何時いつまでも残っていたのであろう。転ころがりこんで来た金玉を押返してしまった人たちが、ある日こんなことをいっていた。

「たいした土地になった。」

「だからとつておおきになればいいのに。」

それは小伝馬町に面した大牢たいろうの一角を、無償で父にくれようといった当時のことを母が詰なつたのだ。

丁度首斬きり場のあたりだったというところの柳の木が、厠はばかりの小窓から見える古帳面ふるちやうめん屋やの友達のうちから帰つて来て、あたしが話したつづきからだつた。

「西島屋のならばをずつとくれるといったのだが、おら不快いやだからな。」

「お父さんは欲がないから、断つてしまったのだとお言いなのだよ。今じゃたいした土地

なのになえ。」

母は、土一升金一升のまんなかで、しかもめぬきの土地の角地面の地主さんになれなかつた怨みうらみを時たまこぼす。

「あすこはな、不浄場といつてたが、悪い奴ばかりはいないのだ。今と違ってどんなに無実の罪で死んだものがあるかしれやしない。おれは斬罪ざんざいになる者の号泣なきしえを聞いているからいやだ。逃のがれよう、逃のがれようという気が、首を斬られてからも、ヒョイと前へ出るのだ。しでえことをしたもんで、後から縄をひっぱっている。前からは、鬚まげをひっぱって、引っぱる。いやでも首を伸す時に、ちよいとやるんだ。まあ、あんな場処はほしくねえな。」

父はやりが流行の長い刀をぶつこんでいた時分、明渡あけわたされた江戸城の守備についていた時、苑内もみしやま紅葉山に配置してある鹿の置物を狙ねらい撃うちにしたものもあるとかいうほどだから、乱暴者に違ちがいなかつたであろうに、その人がそういうのだ。その後打首が廃され、絞首になる時その器具を造るのを調べさせられて用いた夜、どうしても寝具合がわるく、三晩もうなつたので、役人なんざまっぴらごめんだと、囓かじりつきたがるはずの椅子を投ほうりだしてしまつた。そんな折の關係と土地ツ子なので、あの広大な土地を無償ただでくれようというのだ

つたろう。無償とはいわないで、長谷川この土地はお前の名にしておけといわれたのだったそうだ。その当時の政府要路に深い縁のない父でさえそうだったから、その他の懐が、ふくれほうだいだったの言うまでもなからう。岩崎は丸の内一帯の大地主だ、丸の内といえは諸大名の官宅のあつた土地だ。

その時、祖母も言った。

「浜町の三河様の邸やしきあとも、くれるといつたのだそうだよ。」

その時の断りかたがまたふるっている。折角ですが老母がいやがりますから——あすこは糞船くそぶねの一ぱい寄るところで——と。三河様の邸跡は大樹が森々しんしんとして、細川邸とつづき堀越しに大川の水がすぐ目の前にあり、月見に有名な土地で、中洲は繁華になった。

大橋と、両国橋の中洲には、懲役人が赤い着物を着て、小船にのつて土運びをしていた。女橋と男橋がかかつて、土地開きをしたころの夏の人気は、人形町通りから、埋たての中洲へと集っていた。ただもうめちやくちやに賑かだった。おでんやは鍋なべの廻りに真黒に人が立ち、氷やは腰をかける席がないほどの繁はん昌しょうだ。氷やといつても今のようこていに小体な店ではない。なかなか広い店で、中の広い牀しょうぎ几が沢山並んでいた。涼しげな、大きな滝を忍ばせる硝子の簾ガラスすだれ——聯れんがさがつて提灯ちようちんや、花瓦斯ガスの光りが映りゆらめき、

いせいのよいビラが張りわたされ、ねじ鉢巻のあにいが二、三人手を揃えてガリガリ氷を掻きとばしていた。小女が赤いたすきで忙しそうに客の間を走っていた。

いま、デパートの食堂へゆくと、ふと思出すのは、様子はかわっているが、あたしの子供の時分の、えびすやとか、ほていやとかいった呉服屋や、そのわきにあつた、おしるこや萩の餅の店のことで、店さきの高いところから、長い暖簾がかけてあつて、紺地に大きく彩色したえびすだのほていだのがついていた。その頃流行たてだったであろう噴水があつて大きな金魚がいた。だが、食ものは簡単だ。お餅か、お団子位だ。浅草の金竜山にしてもあんと、きなここと、ごまのついた餅、芝の太々餅もおなじくであり、大橋ぎわのおだんご、谷中芋坂のおだんご、そのほか数えたらいくらでもあるが――

中洲は納涼にもつてこいだから、川開きの時分の賑いは別段だった。夏祭りと両国の花火は夏の年中行事と市民にはなっていたのだろう、あんぽんたんも昼寝からむりに覚されて、行水の盪のなかへ入れられ、お船へのせて花火を見せるからと、だましましたしいやがるのに着物をきせられた。

あたしの家で船を仕立るのか――たぶん、前出の金兵衛おじさんの船が来ていたのだつたらうと思う。まだ日の高いうちから、金兵衛さんが紺の透通った着物を着て、白扇

であおいで風通しのいい座敷に座っていると、顔見知りの老船頭だの、大工の棟梁のところの伊三という甥だのがかわるがわるに、一升樽だのその他のものを運んだ。ものわりのいいその人たちが、庭の、敷石のところ立って、座敷の人と応対していたのが、ばかにクツキリと今の私の目にも浮かぶ。

船のつけてあるところは、三河様よりこちよりの細川邸の清正公様のそとところだった。夕潮が猪牙船の横つばらをザブンザブンとゆすつていた。

「まず！ 一杯！」

おとなたちはおいしそうにお猪口を口にもっていった。と、河の中の交際がはじまる。

「いよ——」

遠くの方から挨拶をしあうと、両方の船頭が腕に力をギイツと入れる。

「あれは材木町の船だ。」

竹河岸の材木やは、家内中で派手な船遊山をやっている。暮れないうちの花火は、この船遊山の景物なのである。人々は水をたのしみ、空を仰ぎ、せまい家内や、近所の目から開放された気保養を、涼風とともに満々とうけ入れ、ゆるゆると楽しむのだった。

河上の方から出てきた船は、下流の佃の方まで流してゆく。下流の方から出てきた船は

竹屋を越えて綾瀬の方まで涼風におしおくられてゆく。そして夕暗といつしよに両方がまた漕ぎよせてくる。両国橋の上下に――

そのころ、五、六歳のアンポンタンの感想は――というどむずかしいが、おしつこのことだった。小船にはそういう設備がない。男の人は簡単にすませるが、といつても、まだ暮れきらない大川に、一ぱい船があつてはそう勇敢な人ばかりはない。まして謹ましいその時代の女たちの困りようは察しられる。岸近い船はわたりをかけて、尾上河岸あたりのいきな家にたのむが、河心かわなかのはそうはいかない。気のきいた船頭が、幕や苦とまで囲いをして用をたさせると、まるで、源平両陣から那須与一の扇あふぎの的まとでも見るように、は入る人が代るたびごとにヤアヤアと囃はやす。人間で、なんて癪しやくなものだと、いつて見ればそんな風にアンポンタンは片腹痛かつた。

「おや？ この子は笑つたよ、何がおかしかったのだ。」

おじさんたちにはわからない。ちいさな、てんしんらんまんたる幼子だからこそ、赤ん坊でいえば虫が笑わせるといつた笑い――この場合では嘲ちやうしやう笑しょうを禁じ得なかつたのだ。

「ヤア爺じいさん！」

とかなんとか、笑つた男が笑われて幕の囲いにはいり、テレくさそうに出てくるのだ。ば

かな奴ら！ その水で盃をそそぎ、その流れで手拭をしぼって頭や胸を拭く、三尺へだたれば清しなんて、いい気なものだ。

「玉や——」

みんなが口をあいて空を仰ぎ見る。だがなんと、暗い河の水の油のように重くぎらぎらすることぞ！ 水面を見ると怖い。

アンポンタンは父親の膝を枕にしてボンヤリしていた。もう、そろそろ船が動きだした。あたしは大きくなつてからもそうだが、賑やかなあとのさびしさがたまらなくきらいだった。ことに川開きは、空の火も家々の燈も、船の灯も、バタバタと消えて、即ちにして如法暗夜の沈黙がくるからたまらなく嫌だ。遠くの方へ流れてゆく小さなさびしい火影と三味線の音——小さい者は泣くにもなけない不思議なわびしさに閉じこめられてしまう。

そのまだ、それほど船がバラバラにならない前、すつと摺れちがった屋根船から、

「あら——さんだ！」

というと、これをお着せなさい、川風はさむいわとでもいったのであろう、艶な声がしてフワリと私の上に投げこまれたものは、軽いフワフワした薄綿のねんねこだった。多分帰りの夜風を用心して入れてきたものだろう。私はピョコンと父の膝から頭をあげた。先方

は紅提燈あかちようちんが沢山ぶらさがっているので船の中はあかるい。私たちよりずっと高いところにいるように、膝の方まで見えた。意気な年増としまというのだろう、女ばかりがいた。みんなはでな声を出した。

あたしは終りの花火なんか、あとがさびしいから見ないで、そのねんねこにふっさりと包まれて父の膝に狸寝たぬきねをしていた。子供というもの案外ばかにならないと思うのは、今の自分よりよっぽど不正直で要領を得ている。そして元柳ばしぎわに船をつけてもらうと、抱っこしたまま、いい匂いのものにくるまれて、薬研堀やげんぼりの囲いものの家へ投げこまれた。話はそれが三河様というのは、

風ふくな、ナア吹くな、

三河様の屋根で、

銀羽根ひろって……

と羽根つきながら風が出てくると呪まじないに唄う大川端の下邸跡しもやしきあとである。向岸には大橋の火の見櫓やぐらがあつて、江戸風景にはなじみ深い景色である。細川下邸の清正公門前の大きな椎しいの木の並んだ下には、少壮時代の前かけがけ姿の清方きよかたさんが長く住まわれて、門柱に「かぶらき」と書いた仮名文字の表札がかけてあつた。それより前のことだが、清正公様

の傍わきに歯をいたくなく抜いてくれる家があるというのでいったら、小さな家で、古い障子を二枚たてて、歯みがきを売っている汚いおじいさんが抜いてくれた。大きな樹きのうれに、小さい蚊虫かむしがフヨフヨと飛んでいる夕暮れでうす暗い障子のおかげで、はげた黒ぬりの耳みみだ、鹽らひを片手にもたせて、上をむきなさいといわれた。おじいさんの膝ひざ頭がしらに頭のうしろをもたせかけ、仰向けあおもむにさせられると、その腐ったような顔とむきあった。おじいさんはやつとこみたいなものをもっている。怖いから眼をつぶったら、ガクリと音がして揺うごいていた歯がぬけた。ポコンと穴があいて、血がいくらでも出る。口もゆすがせないで、きたない手でおじいさんは白い粉の薬くすりをつけてくれた。残りを小袋に入れて渡して、血がとまらなかつたらつけろといった。お代が弍銭だというので、なんぼなんでも安くつてびつくりした。蔵前の長井兵助の家は、店で歯磨きや楊子ようじを売っていて、大きな長い刀が飾ってあった。ヤツと掛声してすぐに抜いた。代は五銭の時と十銭の時があった。浅草公園でお馴染なじみだから、大概長井兵助へゆくのだが、お友達におしえられてこの汚いおじいさんの家へいつてしまった。

花火の晩といえ、ある年、丁度花火の盛りな時刻に光りものが通った。二升もはいる大薬缶やかんほどの、鈍く光ったものが、地の上二、三尺の高さで、プカリプカリと流れていっ

た。アンポンタンの家の小さい女中は、裏の方にある厠から出たとき、すぐそばをスーツと流れていったのでキヤツと声をたてた。祖母は金玉だといった。金盃か鍋でふせなければだめなのだといった。都会の夏の夜でさえ無気味なものが、人里はなれた原っぱなんぞでぶつかつたらどんなだろう。

花火の風船のように飛んでしまった。はじめの牢屋の原へ帰ろう。中洲に賑いをとられない前は、牢屋の原が小屋がけ見世もの場でさかっていた。つとめて土地の不浄を払おうとしたのであろう。表通りの鉄道馬車路を商家にし、不浄門（死体をかつき出した裏門）のあつた通りと、大牢のあつた方の溝を埋めて、その側の表に面した方へ、新高野山大安楽寺と身延山久遠寺と、村雲別院と、円光大師寺の四つの寺院を建立し、以前の表門の口が憲兵屯所で、ぐるりをとりまいたが、寺院がそう立揃わないうちは、真中の空地に綱わたりや、野天の軽業がかかっていた。

その中でも、蠟燭屋一蝶という仕掛け怪談話が非常にうけた。そまつなつくりではあつたが、寄席在よりも広いくらいな地どりで、だんだん半永久に造り直していつて、すっかり座れるようになっていた。寄席と違うのは、客席の前の方——入口近くでも曲芸をやり高座でもやるのだ。籠抜け——あるいは白刃を縦横に突通し、ある時は蠟燭の灯を

透間なく、横筒の蛇籠のように長い籠にならべて、その中を桃色の鉢巻きをした子供が、繻子の着物に袴をつけて、掛声もろとも難なく飛抜ける。その鮮かな曲芸と、曲芸師の身なりが、漸くポツポツ拾いよみしていた、曲亭馬琴の『八犬伝』のなかの犬阪毛野を思わせて、アンポンタンの空想ずきを非常に楽しませてくれた。もとより寄席ではない見世ものだから、その曲芸は客を誘うために、あるていどまで、外に立見する客へも見せるから、人気はすばらしかった。怪談の前になると、立っているものも続々はいってきだ。

高座の仕掛けは、その頃はやった何段返しとかいうので、後景が幾段にも変るのだった。場内が暗くなると行燈のそばに幽霊が立っている。青テルの人魂が燃えゆるる――

「かあいやそなたは迷うたナア」

と真打ちの一蝶親方が舞台がかりでいうと、

「うらめしや……」

なんとかと幽霊がいうていた。だが、あたしはぞくぞく怖がった。いま考えると、なかなか策師だったといえる。江戸人の――いえ、当時の日本人の誰にも感じられる、厭な連想をもった、場処がらである。江戸三百年、どんなに無辜の民が泣いたか知れない、脅やかされた牢屋のあとだ。ことに世の中が変動する前には、安政の大疑獄以来、幾多有為の士

を、再び天日てんぴの下にかえさず呑んでしまった牢屋の所在地だ。鬼哭きこく啾々しゅうしゅう、人の心は、その土を踏むだけで傷みに顫ふるえる。その心理を利用したのだ。たねはどんなチャチなものでもかまわない。掴つかんだものが生きている。見る方、聴く方の、お客の方から働らきかけてくる神経ちのちのの戦いくさきがある——そして、下座げざにはおあつらえむきの禅ぜんのつとめ（鳴ものなの名稱）和讃わさんやらお題目お題目やら、お線香せんこうの匂においいはひとりでに流れてくる。

人情にんじやうの弱点じやくてんの怖いもの見たさ、客は昼も夜も満員——夜は通りの四つ角よつかくの夜店よてんと、陽気やうきな桜湯さくらとうの縁台えんたいが、若衆わかしゅたちのちぢまった肝かんつたまをホツと救う——

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

牢屋の原

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>